

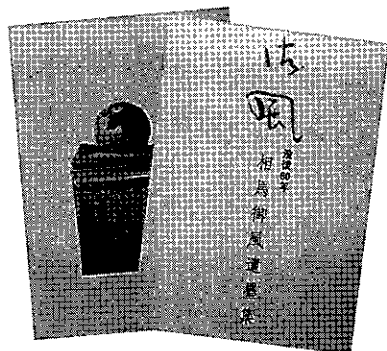
相馬御風遺墨展

(平成22年6月11日～7月25日)

『相馬御風遺墨集』の出版にあわせて、同集刊行委員会との共催により「相馬御風遺墨展」を開きました。

展示品には、御風の代表作をはじめ、筆跡の特徴をよく表すもの、珍しいもの、研究資料として価値が高いもの、著名人との合作など約50点を選定。さらに、当館所蔵の良寛コレクション、御風と同郷で早稲田大学同級生の會津八一関係資料等も紹介し、御風の作品のみならず、研究活動や人柄にもスポットをあてました。

7月3日には講演会を開催。第一部は、會津八一記念館学芸員の湯浅健次郎さんから「相馬御風と會津八一」と題して、第二部は、越佐文人研究会代表の岡村鉄琴さんから「相馬御風遺墨集」の見どころについて、お話ししていただきました。



相馬御風遺墨集 (2冊組)

『相馬御風宛書簡集Ⅳ』出版記念展

山本五十六と相馬御風

(平成22年10月1日～11月7日)

『相馬御風宛書簡集』シリーズ最終巻となる第四集には、学者・研究者・政治家・軍人・実業家の計56人からの書簡91通を収録しています。

本展では、この中から全国的にも知名度の高い長岡市出身の軍人で、連合艦隊司令長官を務めた山本五十六の書簡を中心に、戦争時代の御風の動きや交流を紹介しました。

期間中の10月17日には、河井継之助記念館館長の稲川明雄さんを迎えて記念講演会を開催。五十六の生涯や御風との接点について、エピソード等も交えながら、分かりやすく解説していただきました。



記念講演会の様子

解説 二人を結んだ良寛

五十六と御風の最大の接点は、越後の名僧「良寛」でした。

御風は、大正5年に糸魚川へ帰ってから昭和25年に没するまで約34年間の後半生をかけて良寛を追い求め、20冊を超える書籍を出版し、「良寛研究の第一人者」と称されました。

一方、五十六は海軍少佐時代から「良寛和尚は、自分の最も崇拜する謙信公と共に、越後の生んだ一大偉人だ」といい、御風の著書『大愚良寛』(大正7・5・26・春陽堂)や母校長岡中学校教諭西郡久吾の『北越偉人沙門良寛全伝』など「良寛に関する文献はすべて渉猟」していたといえます(「良寛」第38号「良寛と山本五十六」稲川明雄)。五十六と御風が直接会った記録は残っていません。しかし、同県出身で同世代、ともに各分野の第一線で活躍し、しかも良寛という共通項があることから、若いころからお互いの名前は知っていたと考えて良いでしょう。

現在、二人の交流を確認できる資料は、昭和16年末から五十六が戦死する昭和18年春まで約1年3カ月間におよぶ御風宛五十六書簡8通のみです。

注目 戦争時代の御風

御風は在京時代、トルストイの平和主義に感化を受け、無政府主義者な

御風関連書籍等の目録

平成22年1月～平成23年3月

□雑誌『スタンブマガジン』(平22・3・1・(株)日本郵趣出版) 26P「日本うたよみ紀行 第七回・相馬御風」

□御風会会報『洗心』第20号 相馬文字追悼号(平22・5・8)「相馬文字追悼文」永野敏郎・相馬萬里子・江藤昌美・利根川裕・藤巻道夫、「御風周辺の人々(13) 佐藤吉太郎・耐雪」金子善八郎、「御風の先見性」松野功

「御風歌碑(19) 糸魚川・海望公園の碑」藤巻道夫、「御風の作詞」太学・中学・商業学校校歌」蛭子健治

□雑誌『月間キャレール』6月号(平22・5・20)「歴史上のこぼれ 相馬御風」

□『良寛の藝術―書と詩歌』(西山明美著、平22・6・30、武蔵野書院) 御風収集良寛遺品「秋萩帖」掲載

□図録「一紙で読む生涯と交友―會津八一人生の書」(平22・9・11・新潟市會津八一記念館) 御風宛會津八一書簡、御風収集良寛遺墨ほか

□雑誌『ゆうゆう自適』(平22・10・25・(株)チャレンジャー) 御風収集良寛遺墨「良寛と子供の図」掲載

□『新潟県人物小伝―相馬御風』(金子善八郎著、平22・11・3・(株)新潟日報事業社)

□『新潟県文人研究』第十二号(平22・12・5・越佐文人研究会) 66P「相馬御風宛書簡について(五)」佐藤吉太郎・耐雪」金子善八郎

□ウェブサイト『梅ある記』(平23・1・(株)シーマネーシメント) 御風自画賛「梅図」掲載